

川口名誉教授のご退任を惜しむ

学 長 加 藤 寛

川口教授と接したとき、私は文学専攻者ではなかったので、こういう方こそ文学者なのだろうと勝手に推測していた。一口で言えば教授は文学青年であり、奔放な行動をしておられたように思う。なぜそうなったのかは、教授が三度も人生の大病を患ったとき、その性格が作られていったのだと思う。その奔放さが教授を改革論者であるかのように親近感を覚えたのかもしれない。

フランス語はとりわけ私にとって遠い存在であっただけに、どちらかといえば、そこに新しい改革の道があるとは思わなかった。私は語学というのは本来文法よりもその語感にあると考えていたので、教授がフランス文学にいだく感覚は私と同じものだったのかもしれない。もうひとつの改革論者としての教授のフランス語教授法（川口システム）は、早稲田大学等において教授の実力を存分に発揮させた。本学ではそれを基礎づけることができなかつたことを残念に思う。

思えば、本学に赴任したとき、フランス文学の中心として森永徹教授（故人）がおられたため、川口教授の異能ぶり、才能を十分に知らなかつたことを残念に思う。

たまたま図書館長に任ぜられたとき、経費削減が大きな大学の目標となった。この改革を考えていたとき、玉村雅俊専任講師など若手教員を迎え入れることによって、図書の数だけを増やすという従来の図書館充実のやり方を大きく変えることができた。このように人材をみごとに取り入れる能力をもち、改革を成し遂げたということは、いわゆる汗牛充棟な単なる文学者ではなかつたことを示すものであろう。文学者が図書館の整理統合をおこなうなどという科学的才能は一般的にはあまり適しているとは思えないが、川口教授はそれを見事成し遂げ異能ぶりを発揮した。

若きときに十分に青春を謳歌できなかつた川口教授は定年が近づくにつれてますますその青春ぶりを発揮しているように思う。

今後ともますますお元気で学生の指導にあたり、本学のフランス文学を異色あるものとして続けて頂くことを願っている。